□

風吹けど落つる葉もなし冬枯の雜木林の夕べ淋しも

雪白き中にみどりの大根の葉まばらにみゆる冬のやせ畑

かたへには雪まだ殘る門の畑に雀むれ來て餌をあさる朝

冬枯の庭に一本南天の紅なるがなつかしきかな

白椿落ちたるあとは音もなしたそがれ時の庭は淋しも

夜はふけぬ大天地の靜けさを照せる月の影のつめたさ

霜ふかき枯野の原に只一人立てる心地の今日の我が胸

云ふこともきく事もうし只一人夕くれ方の庭を歩みぬ

あるものをとらへんとして捕へ得ざる今日の心のやるせなきかも

ひそやかに心の中にしのび來て吾をなやます物一つあり

L.

S.

何物か吾おそひくる心地して身動きもせで默してありぬ

ふとしてはもだせる事にたへられで用なき事も云ひ出づるかな

日は落ちぬ西の雲間にほの白う見ゆる光の色のよろしさ

やはらかき春の光にうちひたる少女椿と吾の心と

あか〳〵と空のはてより流れくる夕日に向ふ吾は嬉しも

やはらかき春の光にうち向ふ今朝の心ののどかなるかな

思ふまゝ聲はりあげてうたはまし包みもあえぬ此の嬉しさを

月草

□

ほのかなる春の匂のうらかなし黑き土より麥の青みぬ

むさしのゝ春の木立のむらさきよ黃昏時の泣かまほしさよ

紫のびらうどのごとふくらみし土より野より春は來るらし

麥の芽の若きみどりのかげろひか野を見る君のまなざしのよし